

審査の結果の要旨

論文提出者 清水 光明

本論文「『草茅危言』と政治改革―懷徳堂学主・中井竹山の思想―」は、大坂・懷徳堂の学主・中井竹山（1730~1804）が、天明 8（1788）年 11 月から寛政 3（1791）年冬にかけて、寛政改革を主導した老中首座・松平定信に提出した献策「草茅危言」（5 巻 5 冊）を取り上げ、その形成過程や寛政改革との関係を詳細に検討した研究である。そしてこの作業を通じて、在野にあった竹山が献策により幕府の政治改革に関与できたのはなぜか、同時代の東アジア諸国との比較を念頭に検討する。「草茅危言」の自筆本に基づく書誌学的研究の上に、東アジアを視野に収めつつ、近世日本を対象としてきた政治史と思想史との架橋を試みようという意欲的な試みである。論文は、序章と終章のほか、4 部 12 章からなる。

第Ⅰ部「『草茅危言』を見直す」では、寛政改革期の政治過程の分析と「草茅危言」の書誌学的考察がなされる。第 1 章「『草茅危言』と寛政改革」は、「草茅危言」各巻の提出順序などについて検討を行い、先行研究の誤りを正しつつ、竹山の戦略的態度を浮かび上がらせる。また大坂についての統制政策と文教政策が竹山の提言に従って実施されたことを論証する。第 2 章「『草茅危言』の執筆・提出と為政者たちの接近」は、「草茅危言」を書いていた時期に竹山に接近してきた為政者たちの動向とその背景、そしてそれらが「草茅危言」の構成に与えた影響を明らかにする。「草茅危言」は当初から首尾一貫した構想のもと書き下ろされたのではなかったことが示される。第 3 章「『草茅危言』の書誌学的考察」は、これまで利用されてこなかった大阪大学附属図書館懷徳堂文庫所蔵の竹山自筆本の「草茅危言」に分析を加えることで、各巻の成立と構成変更の時期を特定していく。

第Ⅱ部「『草茅危言』の形成史と政治・社会（1）」では、竹山の思想形成過程や「草茅危言」の形成史という観点から、田沼時代（1751~1788）の政治・社会を竹山はどのように認識し、いかなる政策構想を考えたのかを見ていく。第 4 章「後桜町天皇を詠む」は、竹山の漢詩文を主たる材料に、女帝・後桜町天皇についての認識を考察する。この女帝への批判が、竹山における光格天皇への期待を醸成したとの解釈を提示する。第 5 章「大番頭・加番との交流」は、大番頭や大坂加番などとして京や上方に赴任してくる好学の為政者たちと、竹山との交流を跡付ける。かれらとの交わりが、松平定信との会見へと繋がっていくという見通しが示される。第 6 章「科挙と察挙」は、人材登用制度についての儒者の諸議論のなかに、

田沼期以降の竹山の認識と構想を位置づける。科举制度の問題点を踏まえて構想が組み立てられている点において、科举制度を持たなかった日本における諸議論も、東アジアと同時代性を有していたと結論付ける。

第Ⅲ部「『草茅危言』の形成史と政治・社会（２）」では、第Ⅱ部引き続き、寛政改革期（1787~1793）の政治・社会を竹山はどのように認識し、いかなる政策構想を考えたのかを見ていく。第 7 章「『御新政』と『災後』」は、天明 8 年（1788）の京都大火後の内裏造営をめぐる竹山の政策構想や、彼が収集した政治情報について分析する。竹山は松平定信へ期待をかけるとともに、定信がいわゆる大政委任論者であることを知っており、その上で自らの議論を展開していたことを明らかにする。第 8 章「松平定信を語る」は、竹山が定信の政治をどのように見ていたのかを考察する。竹山は定信についての情報収集を積極的に行之、定信の意向に合わせて献策を行っていたとの結論が導かれる。第 9 章「天文暦学と政治観測」は、竹山の親友・麻田剛立の新出書簡の写しの内容を、彼の天文暦学と関連づけながら検討し、竹山をはじめとする懷徳堂周辺の人びととの重なりと違いを読み取っていく。第 10 章「ロシアの出現とその波紋」は、竹山の対外認識について、古賀精里との対話なども参照しつつ、ロシアと蝦夷地に関する認識を中心に考察する。これまで解釈が大きく分かれてきた『草茅危言』における政策構想について、平時と非常時とが併記されているものと読むべきとの提言を行う。

第Ⅳ部「政治改革の終焉と『草茅危言』の行方」では、寛政改革終焉以降の竹山の動向と『草茅危言』の伝播の過程について見ていく。第 11 章「寛政改革の終焉と竹山のその後」は、松平定信が失脚して以降、竹山は『草茅危言』を信頼できる諸藩の関係者に選択的に送付する一方、自らの軌跡を「立言以治人」として定式化していったことを述べる。第 12 章「『集大成』へ」は、寛政 11 年（1799）に幕府へ『逸史』を献上した経緯とその背景、そしてその後の『史局』総裁への依頼などを中心に、晩年の竹山の動向を検討し、「立言以治人」を貫いた生涯であったとする。終章では、本論文の成果をまとめたのち、比較史上の論点の抽出と、竹山没後の『草茅危言』の役割についての展望が示される。

本論文の成果は多方面にわたるが、ここでは大きく 2 点に要約しておきたい。

第 1 に、自筆本に遡るとともに、多くの関連史料を渉猟した『草茅危言』の書誌学的考察と、寛政改革についての政治過程分析とを高次元で組み合わせることにより、『草茅危言』の執筆年代・構成変更・提出順序の時期を動態的に再構成することに成功した点である。もっとも基礎的でありながら、これまでの竹山や『草茅危言』に関する研究では疎かにされて

きたことでもあり、今後は本論文を踏まえずに竹山や「草茅危言」を論じることは不可能になったと言っても過言ではあるまい。また提出先との交渉や途中での構成変更などを視野に入れた「草茅危言」の生成に関する動態的な理解は、従来そうした点を十分に考慮してこなかった感のある近世日本思想史に対し、少なからぬ衝撃を与えるものであろう。

次に、そうした作業を経た上で、「草茅危言」を精密に読み解くとともに関連する史料を照合することにより、竹山と寛政改革との連関について、その全体像をほぼ明らかにした点である。その具体的内容は各章の概要ですでに述べた通りである。これによって「草茅危言」の背後にあった竹山の同時代認識が明らかになったほか、定信への献策に至る経緯やその際の竹山の態度の特徴、さらに「草茅危言」のうち実際の改革で実施された箇所などについて、確実な史料に基づいた知見が示された。竹山についての研究はもちろんのこと、しばしば竹山を参照しつつ説明がなされてきた寛政改革についての研究にも、多大な影響を与えるものと思われる。

ただこうした優れた本論文ではあるが、若干の不満がないわけではない。審査会では、構成の妥当性についていくつか疑義が出された。また第6章の人材登用制度に関して、時期的な差と地域的な差の双方をより考慮すべきとの意見があったほか、天皇に関する記述についてはまだ追求の余地があるとの指摘や、「立言以治人」という境地の解釈について若干の疑問が呈された。さらに思想史とも政治史とも人物評伝とも異なる独自の領域を開拓した意欲と成果を高く評価する一方、今後はそうした伝統的な手法による諸研究とも、より積極的に切り結んで行って欲しいとの声もあった。

しかしながら、これらは本論文の学術的価値を損なうものではなく、むしろここまで高水準の論文を書き得た提出者に対するさらなる期待を込めた発言であるとの認識で審査委員会は一致した。したがって本審査委員会は、全員一致で本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。